

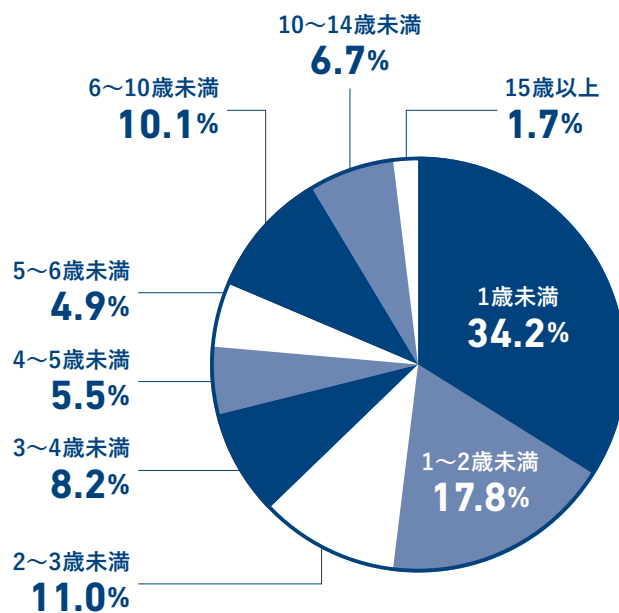
5 子どもの入院時の状況

本調査では、対象期間（2018年1月～2022年12月16日）に、0～17歳の子どもの入院に付き添っていた人を対象とした。対象期間に複数回入院した場合は、最も長期間に及んだ入院について回答を得た。

■ 入院時の年齢

付き添いした子どもの入院時の年齢（すでに退院している場合を含む）をみると「1歳未満」34.2％（ $n=1,244/3,643$ ）、「1～2歳未満」17.8％（ $n=647/3,643$ ）をあわせて半数以上を占めた。その他の年齢にも大きな偏りなく分布していた。

図表2 子どもの入院時の年齢（ $n=3,643$ ）



■ 病気の分類

入院時の病名について、14項目を示し、あてはまるものを把握した（複数回答可）。「その他」25.6%（n=931／3,643）を除き、割合の高かった5項目は、「心臓の病気」18.4%（n=671／3,643）、「呼吸器の病気」15.8%（n=576／3,643）、「小児がん」14.0%（n=509／3,643）、「神経・筋の病気」9.2%（n=334／3,643）、「染色体異常症と遺伝子疾患」9.0%（n=328／3,643）であった。

年齢3区分別に10%以上を占めた病名をみると、乳児（1歳未満）では「心臓の病気」25.6%（n=318／1,244）、「呼吸器の病気」14.8%（n=184／1,244）、幼児（1歳～6歳未満）では「呼吸器の病気」46.5%（n=802／1,725）、「心臓の病気」16.5%（n=285／1,725）、「小児がん」14.5%（n=205／1,725）、児童（6歳以上）では「小児がん」31.2%（n=210／674）、「神経・筋の病気」12.9%（n=87／674）、「血液の病気」10.4%（n=70／674）、「心臓の病気」10.1%（n=68／674）であった。

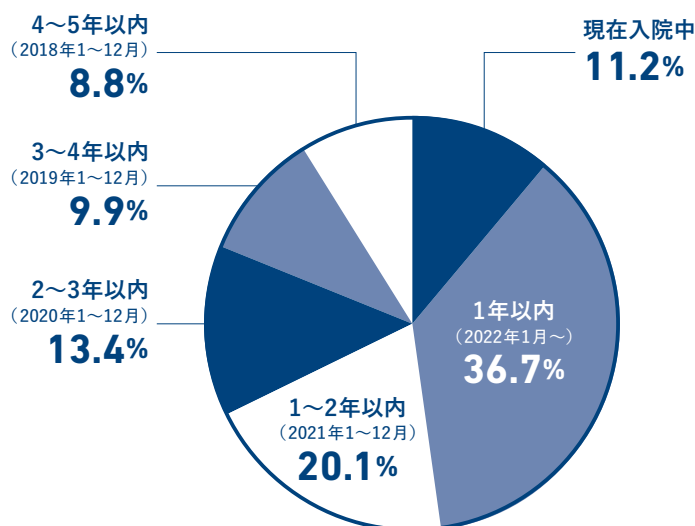
6 入院の状況

■ 入院した時期

付き添い入院の時期をみると、「現在入院中」は11.2%（n=409／3,643）だった。「1年以内」の入院が36.7%（n=1,335／3,643）と最も多く、「1～2年以内」20.1%（n=731／3,643）がこれに次いだ。

付き添い入院の時期をコロナ禍前後で区分すると、「コロナ前（2019年12月以前）」18.7%（681人）、「コロナ後（2020年1月以降）」81.3%（2,962人）であった。

図表3 子どもが入院した時期（n=3,643）

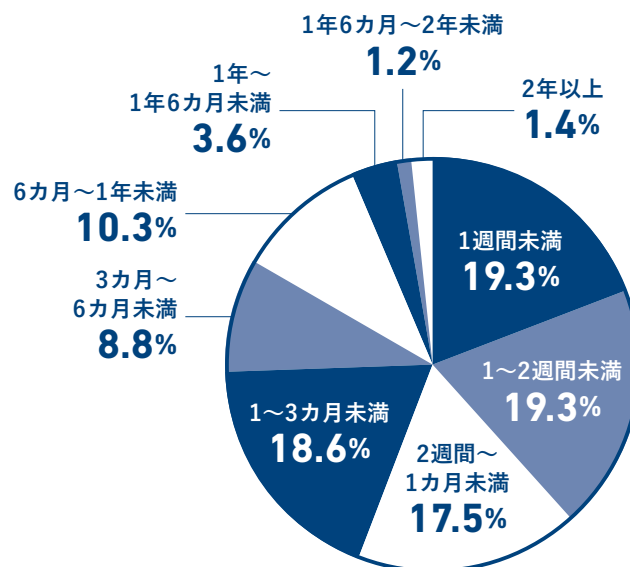


■ 入院期間

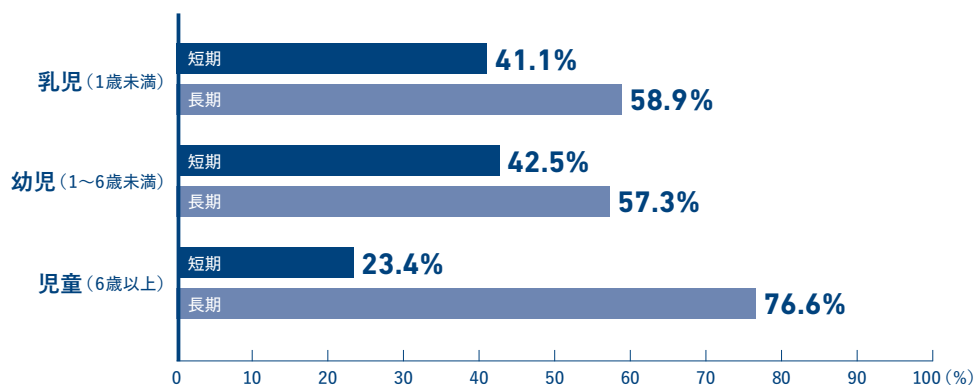
付き添い入院の期間をみると「1週間未満」19.3%（ $n=704/3,643$ ）と「1～2週間未満」19.3%（ $n=702/3,643$ ）をあわせた短期入院が38.6%（ $n=1,406/3,643$ ）であった一方、2週間以上の長期入院のうち、半年以上入院との回答が計16.4%（ $n=598/3,643$ ）を占めた。

年齢3区分別に短期入院／長期入院の内訳をみると、乳児（1歳未満）と幼児（1歳～6歳未満）では「短期」がそれぞれ41.1%（ $n=511/1,244$ ）、42.5%（ $n=733/1,725$ ）であったのに対し、児童（6歳以上）では短期が23.4%（ $n=158/674$ ）、長期が76.6%（ $n=516/674$ ）となっていた。児童で「小児がん」の割合が他の年齢区分より高かったことが、入院の長期化に関連していると考えられる。

図表4 子どもの入院期間（ $n=3,643$ ）



図表5 年齢3区分でみた入院期間

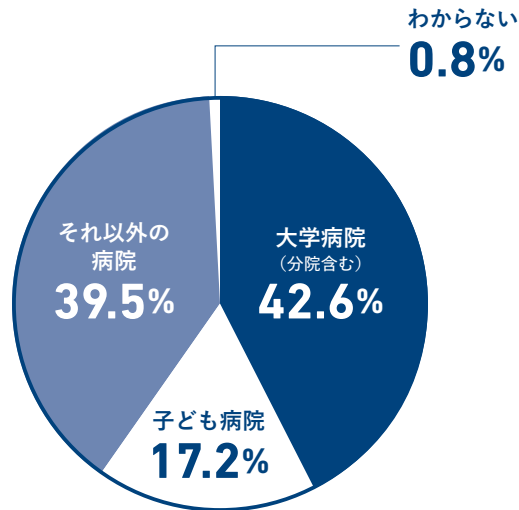


■ 入院していた病院の種別

入院先病院の種別をみると、「大学病院（分院を含む）」42.6%（ $n=1,550/3,643$ ）、「子ども病院」17.2%（ $n=628/3,643$ ）、「それ以外の病院」39.5%（ $n=1,437/3,643$ ）という内訳であった。

年齢3区分別にみると、入院先の内訳に大きな違いはみられなかった。

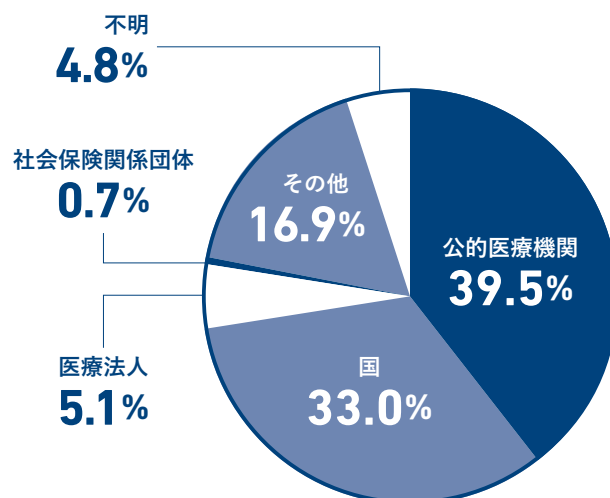
図表6 入院していた病院の種別（ $n=3,643$ ）



■ 入院していた病院の運営主体

病院の運営主体の内訳をみると、「公的医療機関」39.5%（ $n=1,296/3,282$ ）、「国」33.0%（ $n=1,082/3,282$ ）の順に割合が高かった。

図表7 入院していた病院の運営主体（ $n=3,282$ ）



■ 入院していた病院名

回答者が付き添い入院をしていた病院は、全国に幅広く分布していた。このうち、回答者が10人以上であった病院名を以下に示す。

回答者数が多い順		
① 国立成育医療研究センター病院	②④ 群馬県立小児医療センター	③③ 弘前大学医学部附属病院
② 福岡市立こども病院	②⑤ 日本赤十字社医療センター	埼玉医科大学総合医療センター
③ 名古屋大学医学部附属病院	三重大学医学部附属病院	高槻病院
④ 九州大学病院	榊原記念病院	熊本大学医学部附属病院
⑤ 京都大学医学部附属病院	②⑥ 藤田医科大学病院	③④ 日本赤十字社愛知医療センター
⑥ あいち小児保健医療総合センター	②⑦ 長崎大学病院	名古屋第二病院
⑦ 岡山大学病院	総合病院聖隷浜松病院	浜松医科大学医学部附属病院
⑧ 大阪母子医療センター	NHO静岡	NHO岡山医療センター
⑨ 長野県立こども病院	てんかん・神経医療センター	岐阜大学医学部附属病院
⑩ 大阪大学医学部附属病院	広島大学病院	秋田大学医学部附属病院
⑪ 兵庫県立こども病院	②⑧ 富山大学附属病院	JA安城更生病院
⑫ 北海道大学病院	久留米大学病院	ボバース記念病院
⑬ 大阪市立総合医療センター	岐阜県総合医療センター	国立精神・神経医療研究センター
東京女子医科大学病院	小児医療センター	旭川医科大学病院
⑭ 東京都立小児総合医療センター	広島市立広島市民病院	岩手医科大学附属病院
⑮ 新潟大学医歯学総合病院	②⑨ 神戸大学医学部附属病院	③⑤ 千葉県こども病院
⑯ 順天堂大学医学部附属	慶應義塾大学病院	石川県立中央病院
順天堂医院	杏林大学医学部付属病院	倉敷中央病院
京都府立医科大学附属病院	佐賀大学医学部附属病院	日本大学医学部附属板橋病院
⑰ 東京大学医学部附属病院	JCHO九州病院	徳島大学病院
⑱ 松戸市立総合医療センター	JCHO中京病院	自治医科大学とちぎ
⑲ 埼玉県立小児医療センター	③⑩ 東京慈恵会医科大学附属病院	子ども医療センター
⑳ 福島県立医科大学附属病院	鹿児島大学病院	愛知医科大学病院
千葉大学医学部附属病院	山形大学医学部附属病院	医学研究所北野病院
神奈川県立こども医療センター	国立循環器病研究センター	加古川中央市民病院
東北大学病院	③⑪ 兵庫県立尼崎総合医療センター	③⑥ 日本赤十字社長岡赤十字病院
沖縄県立南部医療センター・	名古屋市立大学病院	福岡大学病院
こども医療センター	奈良県立医科大学附属病院	船橋市立医療センター
宮城県立こども病院	関西医科大学附属病院	日本赤十字社成田赤十字病院
⑳ 北海道立子ども	金沢医科大学病院	聖マリアンナ医科大学病院
総合医療・療育センター	金沢大学附属病院	NHO小倉医療センター
㉑ 静岡県立こども病院	③② 日本赤十字社愛知医療センター	宮崎大学医学部附属病院
㉒ 筑波大学附属病院	名古屋第一病院	香川大学医学部附属病院
札幌医科大学附属病院	日本医科大学附属病院	国立国際医療研究センター病院
㉓ 東京医科歯科大学	愛媛大学医学部附属病院	埼玉医科大学病院
医学部附属病院	③③ 天使病院	NHO四国
		こどもとおとなの医療センター

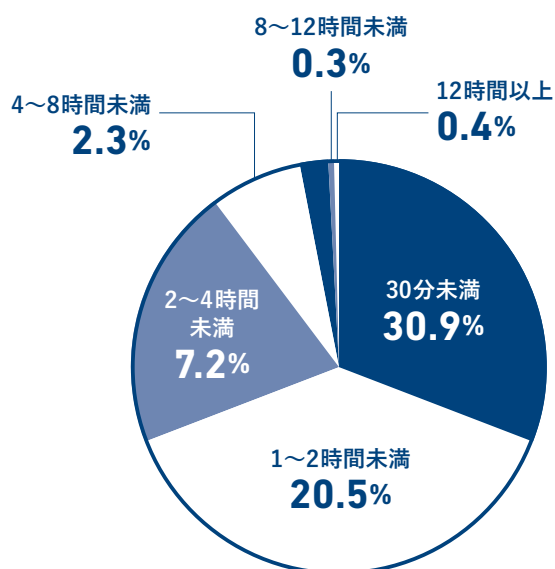
7 病院までのアクセス

■ 自宅から病院までの所要時間

自宅から病院に行くのにかかる時間をみると、「30分未満」30.9%（ $n=1,124/3,643$ ）、「30分～1時間未満」38.5%（ $n=1,404/3,643$ ）をあわせて7割弱が1時間以内であった。それ以上の時間を要する人たちもあり、「1～2時間未満」20.5%（ $n=746/3,643$ ）、「2～4時間」7.2%（ $n=262/3,643$ ）だったほか、少数ながら12時間以上という回答も0.4%（ $n=14/3,643$ ）みられた。

年齢3区分別にみると、所要時間の内訳に大きな違いはみられなかった。

図表8 自宅から病院までの所要時間（ $n=3,643$ ）

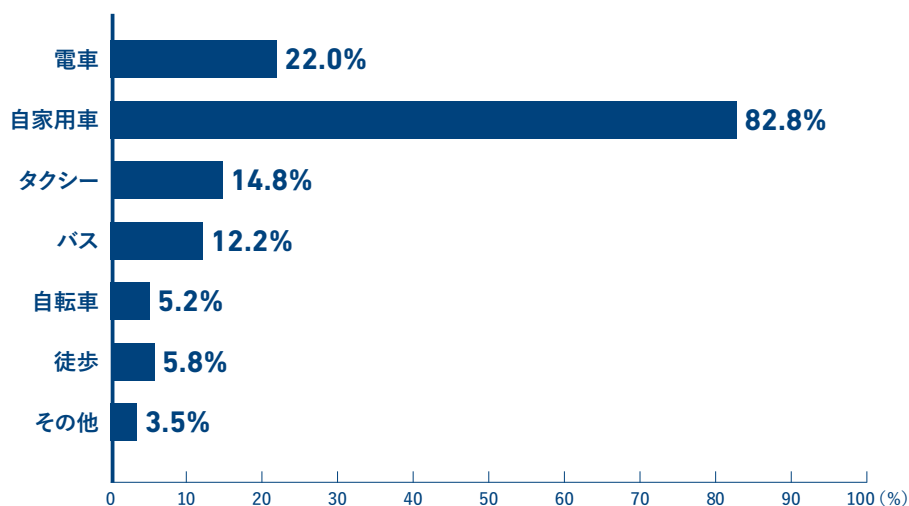


■ 病院までの交通手段

入院先病院に行くまでの主な交通手段（最大3つまで選択）についてみると、「自家用車」82.8%（ $n=3,017/3,643$ ）が最も多く、「電車」22.0%（ $n=802/3,643$ ）、「タクシー」14.8%（ $n=539/3,643$ ）、「バス」12.2%（ $n=445/3,643$ ）がこれに次いだ。

「その他」記入された具体的内容をみると、「飛行機」36人、「新幹線」36人、「船」10人、「バイク」9人といった記載があり、長距離の移動を要する入院となっていることが推察された。

図表9 自宅から病院までの交通手段（ $n=3,643$ ）複数回答



8 付き添い時の状況

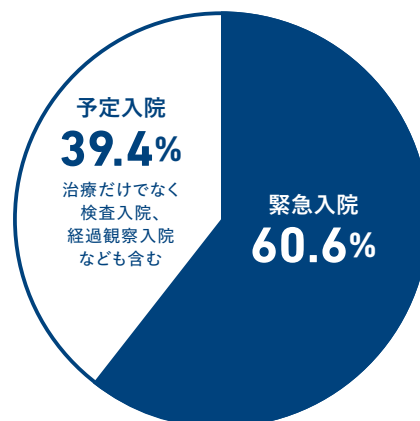
■ 入院の状況

入院時の状況をみると、「緊急入院」60.6%（ $n=2,209/3,643$ ）、「予定入院（治療だけでなく検査入院、経過観察入院なども含む）」39.4%（ $n=1,434/3,643$ ）であり、6割が突然付き添い入院をスタートさせている状況が把握された。

年齢3区分別にみると、入院時の状況に大きな違いはみられなかった。

病気の分類別にみると、緊急入院の割合が高いのは「呼吸器の病気」83.8%（ $n=483/576$ ）、「血液の病気」83.5%（ $n=167/200$ ）、「糖尿病」75.0%（ $n=9/12$ ）、「腎臓の病気」74.7%（ $n=124/166$ ）、「免疫の病気」74.1%（ $n=80/108$ ）などであった。予定入院の割合が高いのは、「心臓の病気」65.3%（ $n=438/671$ ）、「神経・筋の病気」56.3%（ $n=188/334$ ）などであった。

図表10 入院時の状況（ $n=3,643$ ）



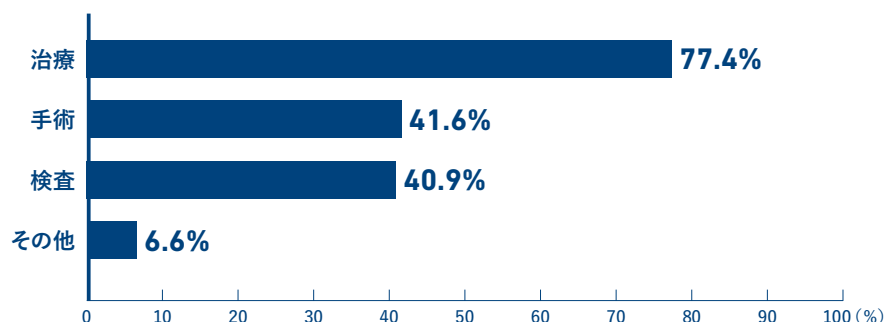
■ 入院の目的

入院目的が「治療」「手術」「検査」のいずれにあたるかを複数回答で把握すると「治療」77.4%（ $n=2,821/3,643$ ）、「手術」41.6%（ $n=1,514/3,643$ ）、「検査」40.9%（ $n=1,489/3,643$ ）となっていた。

年齢3区分別にみると、入院目的に大きな違いはみられなかった。

病気の分類別に入院目的をみると、いずれの病気でも「治療」の割合が最も高い。「手術」が半数を超えたのは「心臓の病気」74.4%（ $n=492/661$ ）、「皮膚の病気」61.0%（ $n=47/77$ ）、「消化器の病気」59.7%であった。「検査」が半数を超えたのは「膠原病」66.7%（ $n=10/15$ ）、「内分泌の病気」58.3%（ $n=28/48$ ）、「血液の病気」52.0%（ $n=103/198$ ）、「小児がん」50.5%であった。

図表11 入院の目的（ $n=3,643$ ）



■ 付き添いの形態

付き添いの形態を、病院に泊まり込んで行う「付き添い入院」と、病院に通って行う「面会」に分けると、「付き添い入院のみ」71.8% (n=2,614/3,643)、「面会のみ」9.9% (n=361/3,643)、「付き添い入院と面会の両方」18.3% (n=668/3,643)であり、9割以上の回答者が、泊まり込みの付き添いを行っていた。

年齢3区分別にみると、「付き添い入院のみ」の割合は、幼児(1歳～6歳未満)で最も高く、78.0% (n=1,346/1,725)を占めた。「面会のみ」の割合は、乳児(1歳未満)14.2% (n=177/1,244)、幼児6.1% (n=106/1,725)、児童(6歳以上)11.6% (n=78/674)であった。

入院期間別にみると、短期(2週間未満)では、「付き添い入院のみ」82.2% (n=1,156/1,406)、「付き添い入院と面会の両方」10.3% (n=141/1,406)、「面会のみ」7.8% (n=109/1,406)であるのに対し、長期(2週間以上)では、「付き添い入院のみ」65.2% (n=1,458/2,237)、「付き添い入院と面会の両方」23.6% (n=527/2,237)、「面会のみ」11.3% (n=252/2,237)となっていた。

病院の種別にみると、「付き添い入院のみ」の割合が高かったのは、大学病院76.2% (n=1,181/1,550)、大学病院・子ども病院以外の病院79.5% (n=1,142/1,437)であった。一方、子ども病院では「付き添い入院と面会の両方」35.4% (n=222/628)と「面会のみ」21.3% (n=134/628)の割合が比較的高い。

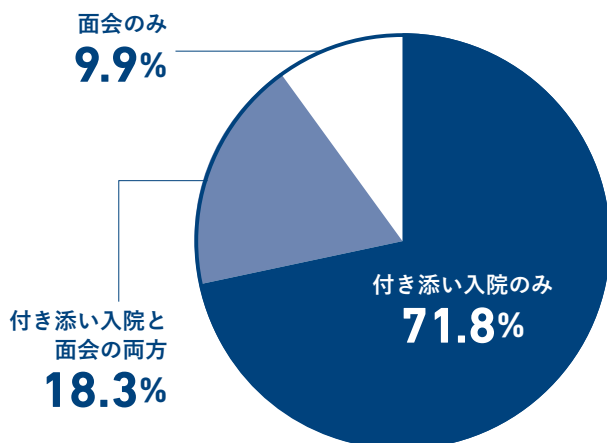
■ 付き添い形態の選択可否

付き添いの形を選べたか否かについては、「選べた」21.0%（ $n=764/3,643$ ）、「選べなかった」79.0%（ $n=2,879/3,643$ ）であり、8割近くが選択の余地なく付き添いをしていた。

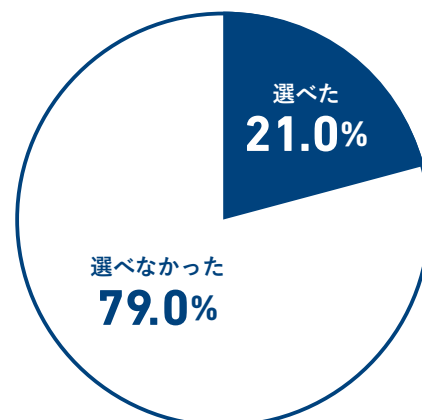
年齢3区分別に「選べなかった」と回答した割合をみると、乳児（1歳未満）で84.0%（ $n=1,045/1,244$ ）、幼児（1歳～6歳未満）で83.0%（ $n=1,385/1,725$ ）、児童（6歳以上）で66.6%（ $n=449/674$ ）であり、年齢が低いほど高い割合である。

入院期間別では、短期（2週間未満）で82.9%（ $n=1,166/1,406$ ）、長期（2週間以上）で76.6%（ $n=1,713/2,237$ ）が「選べなかった」と答えている。病院の種別では、大学病院（分院を含む）で81.4%（ $n=1,262/1,550$ ）、大学病院・子ども病院以外の病院で85.5%（ $n=1,228/1,437$ ）が「選べなかった」とする一方、子ども病院では58.6%（ $n=368/628$ ）と選択可能な割合がやや高くなっている。

図表12 付き添いの形態（ $n=3,643$ ）



図表13 付き添い形態の選択可否（ $n=3,643$ ）

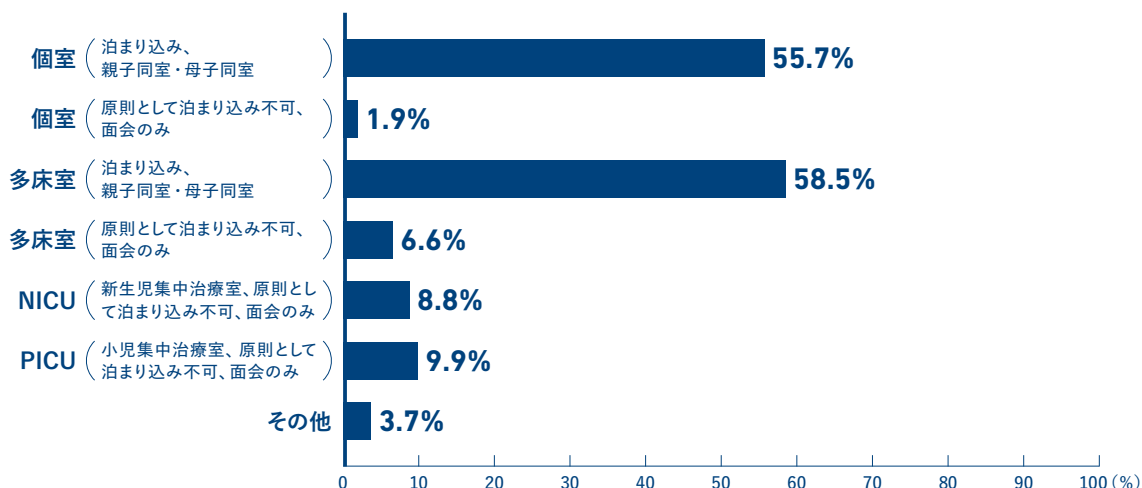


■ 病室のタイプ

付き添い時（泊まり込み、面会の双方を含む）の病室のタイプを複数回答で把握すると、「多床室（泊まり込み、親子同室・母子同室）」が回答者の58.5%（ $n = 2,132 / 3,643$ ）、「個室（泊まり込み、親子同室・母子同室）」55.7%（ $n = 2,030 / 3,643$ ）と、高い割合であった。

年齢3区分別にみると、乳児（1歳未満）では原則として泊まり込み不可・面会のみであるNICUが20.6%（ $n = 256 / 1,244$ ）、PICUが12.9%（ $n = 161 / 1,244$ ）であった。

図表14 病室のタイプ（ $n = 3,643$ ）複数回答



■ 付き添い中に泊まった場所

付き添い時（泊まり込み、面会の双方を含む）に主に泊まっていた場所をみると、「病室」90.2%（ $n = 3,287 / 3,643$ ）が突出して多く、「自宅」は13.0%（ $n = 472 / 3,643$ ）である。また、「家族の滞在施設（マクドナルドハウスなど）」5.0%（ $n = 182 / 3,643$ ）、「ホテル」1.9%（ $n = 70 / 3,643$ ）などに宿泊する人も一定数みられる。「その他」の具体的記載内容をみると「ウィークリーマンション・マンスリーマンション・賃貸アパート等」と回答した人が15人いたほか、院内の家族控室等（6人）、院内ロビーの椅子（1人）という記載もあり、「車中」（16人）とあわせて厳しい環境で宿泊している様子がうかがえる。

年齢3区分別にみると、宿泊場所の内訳に大きな違いはみられなかった。

図表15

付き添い中に
泊まった場所
（ $n = 3,643$ ）複数回答

